

物語る絵画

根津美術館（南青山） 23.07.15～08.20



「根津美術館」は、東武鉄道などの社長を務めた実業家「初代根津喜一郎」（1860～1940）が蒐集した日本・東洋の古美術品コレクションを保存し、展示するためにつくられた私立美術館である。彼は若い頃から古美術品に関心を寄せ、蒐集ぶりは豪快を極めたと語り草になっていて、それらのコレクションを単に秘蔵するのではなく「衆と共に楽しむ」ことが願いであったとされている。その遺志を継いだ二代「根津喜一郎」が、1940年に財団を創立し翌年には「美術館」を開館し、1991年には創立50周年記念事業として増改築を行っている。

当館の所蔵品数は、「4643点」でスタートして、現在は国宝7件、重要文化財88件、重要美術品95件を含み「7600件」を超える規模となっている。

長谷川派（推定）《浮舟図屏風》江戸時代（17世紀） 紙本着色 6曲1隻

『源氏物語』宇治十帖の「浮舟（第51帖）」に取材した有名な場面を屏風の画面に印象深く描いた作品は、恋する浮舟を宇治の山荘から連れ出した匂宮が小舟で対岸の別荘へと向かう様子である。櫓をこぐ舟人のほかに、貴族の男女がひと組際立って色鮮やかに描かれている作品は、船を大きく斜めにとらえた不安定な構図が、浮舟の行く先の運命を象徴している。（上図は部分）



行有・専有筆《涅槃（ねはん）図》：釈迦がインドの跋提河（バツタイガ）のほとりで亡くなる情景で、母の摩耶夫人が天から駆け付けて、弟子・俗人・動物たちが大層悲嘆にくれている様子が克明に描かれている。（上左図）

《舞の本断簡》：鼓に合わせて謡い舞う、幸若舞の台本に絵を加えた冊子で、映画化されることの少ない曲を含む点で貴重な遺品である。（上右図）